

国際化、共生、エスニシティそして日本社会

小林 孝行

近年、日本社会でも在日外国人といわれる人たちの存在が無視できないようになってきており、在日外国人に対して開かれた日本社会の形成ということが課題となっている。この課題は国際化の進展と、深刻化する地域格差あるいは地域対立などを背景としており、日本のみならず、世界的な広がりをもつ問題である。

ここでは、キーワードとして国際化概念と共生概念そしてエスニシティ概念などを検討することを通して、日本社会の共生について考える手がかりができればと思う。

1. 国際化

まず、国際化について考えてみよう。国際化internationalization, globalizationという用語は今日では日常的にはしばしば用いられているが、学術用語としてははっきりと定着しているとはいえない。その概念は、近年日本の社会学会においても主要な研究テーマの一つとしてさまざまな議論が行われているが、少なくとも最新版の日本の社会学辞典には未だに掲載されていない。

それに関連した用語として、国際主義internationalism、インターナショナルinternational、地球システムglobal system、地球社会化societal globalization、世界システムworld systemなどが掲載されている。そこで、internationalismを「国際主義、きわめて多様な意味で用いられているが、一般的にいて独立した主権国家の併存を前提にして、諸国民の協調・連帯を重視する立場や運動のことをいう。国家主権の制限を伴うような超国家的社会の形成を理想としつつも、国家の独立した機能を肯定する点で普遍主義やコスモポリタニズムとは異なっている。……」(『新社会学辞典』、有斐閣、1996年、74)と述べている。

国際化という概念にはさまざまな定義がなされており、ここでそのすべてを検討することはできないが、少なくとも「人やものそして情報などが地域とか国家の境界を超えて地球的な規模で移動すること」を前提としている。その前提の上に政治制度、経済システム、科学技術、文化や思想、そして生活習慣に関わる「もの」や「情報」が統合的に世界的な影響を与えている状態といえるだろう。

地球上では、近代以前にはいくつかの小世界が分離した状態で存在していた。例えば、東アジア世界では紀元前から19世紀半ばまで漢民族を中心とし、少数民族を周辺とする華夷体制と呼ばれる小世界が作られていた。このことは東アジア世界だけではなく、地中海世界、イスラム世

界など地球上ではいくつかの小世界が存在していた。小世界内部では時には対立抗争が存在し、小世界の支配層は交代することはあったにせよ、小世界そのものを打ち壊すようなことはなく、それらの小世界のなかでは人的物的交流が行われ、それだけで一つのまとまりをもった自立した体系であった。

小世界同士の間では、たとえばシルクロードのような通路が開かれ、中心同士で相互に交流が開かれていた。時には対立することもあったが、他の小世界を打ち倒し、支配するようなことはほとんど無かった。従って、この段階では、地域や国家を超えて人やものの移動が行われたとはいえるが、地球的規模で行われたとまではいえないだろう。

地球的な規模での国際化の過程にはおよそ三つの形態が考えられる。ただし、それら三つの類型は必ずしも明確なものではないし、時代区分もはっきりとしたものではなく、重複して存在する場合も考えられる。

第一の国際化は、歴史的には15、6世紀の大航海時代を経て、20世紀前半までのヨーロッパ諸国による世界の一元的支配が達成される段階である。政治的経済的には植民地支配の完成などもあって、地球規模の世界市場が実現された。科学技術、社会思想では「普遍主義」的性格をもつものといえよう。それはいわゆる近代化の開始の段階であるともいえるが、そこでも西欧原理を優れたものとし、西欧中心主義のもとに非西欧世界を西欧原理によって一元化しようとしたものである。この段階の国際化はまた、西欧化westernizationともいえる。つまり、非西欧諸国は、ナショナリズムを主張し、西欧列強の軍事的、政治的圧力に対しては反発しながらも、「普遍主義」的性格をもつ科学技術、社会思想に基づいて、近代国家を建設しようとしたのである。

近代化の過程は、政治的経済的文化的社会的に封建社会からの解放と人間の普遍的な平等、そして個人の自由な活動の保障という原理に基づいた世界史的な発展であったともいえるが、西欧諸国による非西欧諸国の侵略、従属ともいえる。自由と平等という西欧近代原理は、西欧諸国の国内では承認されたものの、非西欧諸国には適応されなかった。つまり、自由と平等という原理はあくまでも理念であって、現実にはナショナルインタレストの対立と弱肉強食原理が支配した。それは植民地主義、ないしは帝国主義ということができよう。そこに、近代化の二重性が存在する。

第二の国際化とは19世紀半ば以降、20世紀末までの段階で、マルクス主義によって主導された、社会主義インターナショナルの実現である。これはいうまでもなく、資本主義に対する対抗イデオロギーであり、近代化の二重性を解決しようと図られたものである。

第2次世界大戦後の世界では、ナショナリズムが強調され、植民地主義が否定された。米ソの対立と南北（先進国と後進国）対立があらわになった。そこでは平和共存が主張された。南北対立では政治的な独立は実現されたものの、経済的自立が実現されなかった。現代では、ソ連や東ヨーロッパの社会主義国家の崩壊によって、米ソ対立は解消され、米国の一極支配構造が成立し

たが、地域紛争が頻発するようになった。

そこで第三の国際化はまさに、現代の国際化である。これは科学技術の発展により、人、もの、情報の移動が一層活発に行われるようになったことと、その中心となる地域がアメリカに一極化したのである。従って、この段階の国際化はまたアメリカ化americanizationとでもいえる。

しかし、現代は国際化と地域化の二分化ないし併存状態にあるともいえる。

アメリカへの一極集中が進行する一方、世界では民族紛争が頻発している。つまり、国家の境界を超えたボーダーレス化が地域化を一層強めており、近代国家を基盤にしたイデオロギーとしてのナショナリズムが弱まり、それに代わってエスニック・イデオロギーが強調されるようになっている。

2. 共生

次に、共生について、考えてみよう。共生概念は英語では、symbiosis, conviviality, co-existence, living togetherなどと表現される。

まず、symbiosisは社会学では人間生態学を提唱したパークによって用いられた。その概念は生物学をモデルとしたもので、異質的な諸個人が無意識的に競争し協同する関係の中で共に生活することをいい、自然的なあるいは無意識的な状態をさす。パークによればそれはコミュニティの段階で生じるものであり、コミュニティからソサエティへの移行過程では、社会過程として競争、闘争、応化、同化の段階を経るのであるが、symbiosisは競争の段階に対応するもので、それ以降の段階では対応しない。

パークは『社会学入門 Introduction to the science of sociology』で、symbiosisを蟻とアブラムシとの相互依存関係を例にして説明しているが、そこでsymbiosisをliving togetherともいっている。

Conviviality概念は、I. イリッチによって提唱されもので、主として制度や法律までも含んだ「道具」に対して、人間相互のあるいは人間と環境との自律的で創造的な、生き生きとした関係をさし、そのなかで実現される個人の自由もさす。

第二次大戦以後、米ソの対立が激化するなかで平和共存が主張された。その共存概念はco-existenceである。これは主として体制間ないしは国家間の政治的共存を意味するものであった。

現代の共生とは、広くは人口問題、エネルギー問題と関連した人間と自然との共生から、国家間、エスニック集団間、性（男女）間、年齢（児童、青少年、壮年、高齢者）間、障害健全（障害者と健全者）間、宗教間、階級間など、さまざまなレベルでの共生が問題となっている。そこでは、「バリアフリーbarrier free」、「ノーマリゼーションnormalization」、「ともに生きるliving together」などのような概念が用いられることもある。

ところで、共生というからには、その前提として複数の異なった存在と、それらの間で相互に

接触がなければならない。そのもっとも単純な形としての二者関係については、ジンメルは共存、互助、対立という形式が見られると述べている。そして、ジンメルを継承したパークは社会的相互作用の過程を競争competition、闘争conflict、応化accommodation、同化assimilationとしたことはよく知られている。この相互作用の過程は異質なものの接触がただちに共存だけをもたらすものではないという示しているという点で、妥当な考えだとは思われる。共生という場合に、固定的に、また静態的に捉えられれば、かえって現状肯定的にならざるをえず、それでは人間社会の時間的空間的变化に対応することができないし、それに対する反発も存在する。

ただし、相互作用の過程が単線的なもので、その最終的な段階が同化であるというパークの結論は、現代では必ずしも適切なものとは思われない。これは1920年代アメリカの、異なった文化をもった人々がアメリカ社会に適応し、一つの典型的なアメリカ人になるという「メルティング・ポット理論」に基づいたものであった。いわば「古き良き時代のアメリカの理念」であったといえるだろう。

複数の存在とその接触としての共生はまた文化変動culture change、文化変容あるいは文化の接触変化acculturation、そして文化摩擦culture conflictという概念によって捉えられてきた。原理として、共生が実現するためには、二者関係で水平的な関係が必要である。どちらかが優越的な位置にあると、共生は実現しにくい。これまでの文化変容の理論では、一方の文化変容だけが問題となった。つまり、二つの文化のうち、支配的な位置にあるほうはどのような文化変容もなく、ただ従属的な位置にあるほうだけの文化変容が求められたのである。

その背景には、文明と野蛮という二元対立図式があり、文明の名によって野蛮の開明を図るという名目があったように思われる。このことは古代において東アジア世界でも、地中海世界でもあったし、近代化の過程におけるヨーロッパ世界においても同様に存在した。西欧の近代の優越意識の背景として、人間はどこまでも完成にむかって進んでいくという「進歩の観念idee de progres」も存在した。これは一元主義ということができる。

その一元主義に基づいた単線的近代化論、つまりどの社会も時間的なずれを伴うものの、西欧社会のように政治的民主化と経済的発展に向かって進行するという理論は、第2次大戦後の南北格差の拡大によって、実現困難になった。それは従属理論によっても論証されている。また、西欧社会においては非西欧社会の人々が、以前においてはほとんど例外的にしか存在しなかった。そこでは西欧社会にとって非西欧社会の文化は時としてオリエンタル指向として一部で受容されることはあったが、ほとんどの場合非西欧社会は遠く離れた存在であり、それに対する関心は薄かったといえよう。ところが第二次大戦後、西欧社会においても非西欧社会の人々が急速に増加していき、国内民族的マイノリティを形成することになった。その結果、非西欧社会との接触は、はるか離れた植民地の出来事ではなく、すぐ近くの国内的な問題となった。

ところで、アメリカ合衆国は、そもそも近代の普遍的人権原理を元にして移民国家として成立

した国家である。アメリカの理念としては先述したように、メルティングポットを理想としたものであった。ただし、ネイティブアメリカンの存在は括弧に入れていたし、現実として黒人はそれから排除されていた。アメリカの理念は実際にはWASPを中心としたアングロ・コンフォーミティという一元主義であったといえる。

そのアングロ・コンフォーミティー一元主義が1960年代の黒人闘争の過程で、黒人、黄色人種、女性の解放などが主張されるなかで、多元主義が主張されるようになった。そこから、ジェンダーgenderやエスニシティethnicityという概念と視角が形成されることになった。その視角からみると、これまで普遍的だと信じられてきた西欧の人間思想は少なくとも現実には「西欧社会の成人した、しかもある程度の資産を所有していた白人男性」に基礎をおいた思想であったことが明かとなったといえるだろう。

これまで述べてきたところからも明らかなように、国際化の過程では一元主義的な観点が存在した。それは人間社会の進歩という点ではそれなりの意味があったことを否定することはできないが、一方向的なものであり、双方向的なものではなく、共生は成り立たなかった。そこで、多元主義的な観点をもとにしてはじめて共生が成立することになる。また、共生という場合にも、静態的なものでは、かえって現状を固定することになり、ダイナミックな変化に対応することができないという批判を受けることにもなった。

3. エスニシティ

これまで近代化の問題が指摘されるなかで、改めて近代そのものを再検討しようと試みられてきた。それは例えば「近代の超克」、「脱近代」、「ポストモダン」などの議論に見られるところである。

ここでは、エスニシティの観点から検討する。

エスニシティという概念それ自体は、社会学では1970年代になって作られた比較的新しい概念であるが、その原形ともいえる民族集団というまでもなく歴史的、社会的、文化的差異に基づく社会集団である。文化的差異それ自体は古くから存在してきたが、近代国家の成立に伴い、新たにナショナリズム思想の登場とともに、それらのいくつかの民族集団は近代国民nationalityあるいは近代市民citizenに統合され、近代化の進展とともにいずれは消滅するものとみなされていた。

近代国家の形成に大きな力を果たしたナショナリズムには求心的な側面と遠心的側面が存在する。近代国家の形成に至る過程では民族解放、民族独立はおおいに力を与えたが、他民族に対しては排斥の傾向を示し、ナショナル・インタレストの対立から国家的な闘争をもたらすとともに、新たに形成された近代国家内での少数民族をも抑圧する傾向が生じた。

その民族集団が無視できない存在となり、エスニシティという新たな概念が作られたのは、国家の中であるいは国家を超えて民族紛争が、近年の国際化、ボーダーレス化時代の進展とともに、一層はげしいものとなり、これまでのナショナリズムでは捉えられない問題が出現したことによるものと思われる。

アメリカ合衆国では、1960年代に始まったベトナム反戦運動と黒人公民法運動の高揚する過程で、黒人、黄色人種、女性の解放などが主張されるなかで、エスニシティ ethnicity という視点が導入された。また、第二次大戦直後のイスラエルの建国以来続いているパレスチナ民族対立、ヨーロッパでは、近代国家の内部における民族紛争としてイギリスにおける北アイルランド紛争、フランスにおけるオクシタニー、コルシカ民族運動、スペインにおけるバスク独立運動、そして近年では社会主義国家の崩壊に伴った東ヨーロッパ諸国の民族紛争、独立以降のアジア・アフリカ諸国の民族あるいは部族対立など数え切れないほどの民族問題が出現しており、それらの問題を考える視点としてエスニシティ概念が注目されている。

ただし、エスニシティを考慮する場合も、ナショナリズムと同様、求心的な側面と遠心的側面が存在する。また、政治的側面や経済的側面だけを強調すると分離的、対立的なものにならざるをえない。そこで、インター・エスニック関係 inter-ethnic relation を重視することも必要となってくる。

4. そして日本

日本の場合、前近代では、東アジア世界の中で日本は中国を中心とする華夷体制のもとで、東夷を形成する一国家であった。そこで、日本はまず中国、朝鮮文化の受容し、その上で民族的な固有の伝統文化の創造を行ったといえる。そこでは、文化の接触変容が重要な意味をもつ。

また、西力東漸による近代化の過程では攘夷と開化の対立を体験した。そこで攘夷とは伝統的な日本的価値観を強調し、西欧文化を野蛮なものとして退けるものであったのに対して、開化は西欧文明を導入し日本社会を発展させていこうとするものであった。実はこの攘夷と開化の対立は中国やコリアなど伝統的な東アジア世界に共通して見られた現象であった。そのような中において、日本は独自の近代化を推し進めた。西欧文明の受容については、特に「和魂洋才」といわれるように日本社会は西欧の科学技術を中心にして導入した。

日本は近代化過程で、「富国強兵」「脱亜入欧」などのかけ声のもと、西欧列強をモデルとした近代化＝西欧化を推し進め、前近代には東アジア世界で華夷体制を形成し、交隣関係にあったコリアを、さらには朝貢関係にあった中国の一部すらも自らの植民地とした。

そこで、日本の近代化過程の再検討が求められているといえよう。その際、エスニシティの視角から検討することは意味深いものと考えられる。なぜなら、これまで日本ではエスニシティに関しては、ほとんど捉えられてこなかったといえるだろう。つまり、現実存在するにも関わら

ず、いわば「隠された問題」であった。

具体的には日本に住むコリア人を初めとした外国人問題の再検討が日本の課題である共生を考える一つの手がかりとなると思われる。

参考文献

アントニー・D. スミス (栗山靖司他訳) 『ネイションとエスニシティ』名古屋大学出版会、1999年

梶田孝道編『国際社会学』名古屋大学出版会

金泰泳『アイデンティティ・ポリティクスを超えて』世界思想社、1999年

徐龍達他編『多文化共生社会への展望』日本評論社、2000年

宮島喬他編『現代ヨーロッパの地域と国家』有信堂高文社、1988年

森岡清美他編『新社会学辞典』有斐閣、1993年

Robert E. Park, Introduction to the Science of Sociology, Student Edition The University of Chicago Press, 1969